静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果に関するアンケート調査結果
－平成27年度－

平成28年2月5日

白木 賢信（常葉大学）

Ⅰ　調査結果の概要

1.　**利用団体の小学校相当世代への傾斜は一層進んでおり、利用宿泊数の最も高い比率が「1泊」から「2泊」に移っている。**

利用団体のプロフィールについては、「小学校」と「7～12歳」がそれぞれ最も比率の高い。「小学校」は平成27年度で50％を越え、「7～12歳」は平成27年度は70％に達している。利用宿泊数は、「1泊」と「2泊」が全体の殆どを占めながらも、平成26年度までは「1泊」が最も高い比率であったところ、平成27年度では「2泊」最も高くなっている。

2.　**「自主性や協調性、社会性を身につける」が最も比率の高い利用目標であるのは変わりなく、この項目に収斂しつつある。利用目標の達成度は「期待以上にできるようになった」および「だいたい期待通りできるようになった」が殆どである。**

利用目標の種類について、「自主性や協調性、社会性を身につける」は9ヶ年を通じて最も比率の高い項目で、平成27年度で70％台に達している。次いで比率の高い項目は年々変化が見られるが、平成24年度以降は「自然に対して興味・関心を持つようになる」が10％台で推移している。利用目標の達成度は、「期待以上にできるようになった」と「だいたい期待通りできるようになった」を合わせた比率が9ヶ年を通じて90%を超えている。

3.　**利用後の参加者の変容について、上位3項目の「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」「時間を守るようになった」「周りの人に優しく接するようになった」に次ぐ「仕事などを積極的にするようになった」が第4位で固定化されつつある。**

利用後の参加者の変容について、「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」が平成24年度以降最も比率の高い項目である。次いで順に高い「時間を守るようになった」と「周りの人に優しく接するようになった」は、平成27年度の比率がそれぞれ9ヶ年で最も高い。「仕事などを積極的にするようになった」は、平成25年度までは20％台、平成26年度以降は30％台で推移している。

4.　**繰り返し利用することによって予想される変容について、上位3項目の「時間を守るようになる」「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「周りの人に優しく接するようになる」に次ぐ「仕事などを積極的にするようになる」が上昇傾向にある。**

繰り返し利用することによって予想される変容についてで、平成20年度からの8ヶ年通じて「時間を守るようになる」「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「周りの人に優しく接するようになる」が上位3項目で変わりない。特に、「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」は平成27年度にあって最も高い比率に達している。また、「仕事などを積極的にするようになる」の比率は平成24年度以降上昇傾向にある。

II　調査の概要

1.　目的

本調査の目的は、静岡県立朝霧野外活動センター（以下、センターと呼ぶ）利用団体のセンター利用による教育的効果を明らかにすることである。それにより、施設の評価は利用者数の増減に頼るところが大きい中、それ以外の評価指標としての基礎資料を提示するが、昨年度に引き続き、ここでは平成19～27年度の9年間における経年変化の傾向もあわせて提示することにしたい。

2.　内容

上述の目的を達成するために、センター利用による教育的効果に関する調査を行うが、その内容は以下の通りである。

(1)　利用団体の種類
(2)　利用団体の主たる年齢層
(3)　利用宿泊数
(4)　利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）
(5)　利用目標の達成度
(6)　利用後の参加者の変容
(7)　繰り返し利用することによって予想される変容

3.　対象

平成27年度のセンター利用団体

4.　方法

質問紙による配付回収法で、具体的な手順は次の通り。

(1)　センター担当職員が、各利用団体担当者に、利用期間中にアンケート形式の質問紙を配付する。
(2)　各利用団体担当者は、センター利用後約1ヶ月の間に質問紙に回答し、回答済の質問紙をファックスでセンター宛に返送する。

5.　調査票（質問紙）の回収状況

回収数（率）　99（15%）　　有効回収率　99（15%）

なお、ここで算出した回収率・有効回収率は、平成27年度における統計上のセンター利用団体数（645団体）を母数としている。

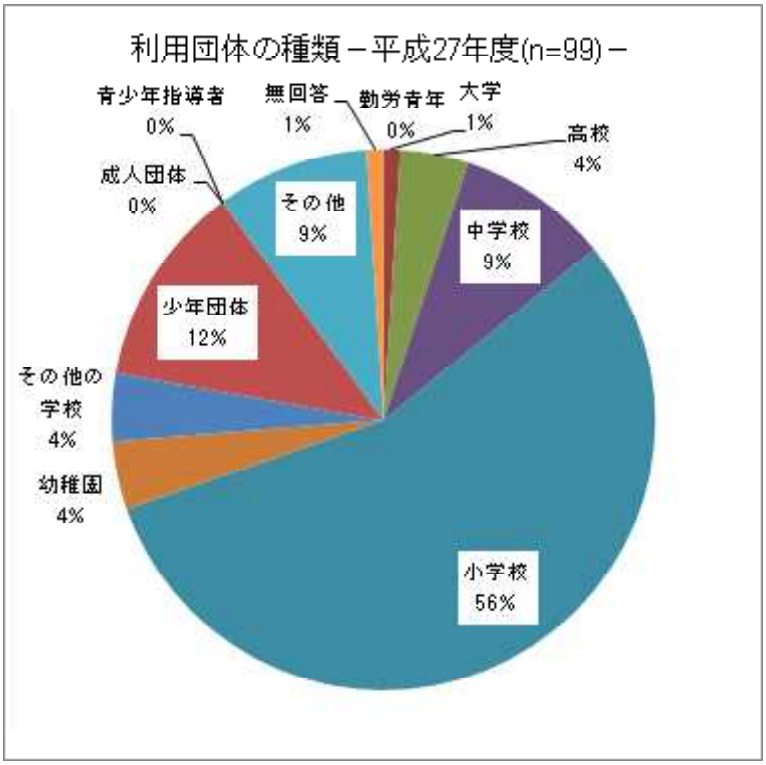
6.　実施期間

平成27年4月～平成28年3月

Ⅲ　調査の結果

1.　利用団体のプロフィール

ここでは、本調査の対象となった利用団体のプロフィールについて述べることにしよう。まず、利用団体の種類についてであるが（図1）、最も比率が高いのは「小学校」の56%で、次いで高いのは「少年団体」の12%、さらに「中学校」および「その他」の9%が続いている。なお、学校関係は78%で全体の8割近くを占めている。



「その他」の内訳

NPO法人，学童保育サッカークラブ，スポーツクラブ，中学生対象の研修，ファミリー，福祉団体，まちづくりセンター，民間学童保育

図1　利用団体の種類

この利用団体の種類の平成19～27年度間の変化について示したものが図2である。これによると、最も比率の高い「小学校」は、30%台後半で推移していたところ、平成26年度で40%を越え、平成27年度で50%を越えている。次いで高い「少年団体」は、「小学校」との差で見ると、平成26年度では23ポイント差であったが、平成27年度では44ポイント差に開いている。その次に高い「中学校」は平成21年度から下降傾向にあり、平成27年度までに8ポイント低下している。「その他」も同様の傾向で、平成23年度から平成27年度までに9ポイント低くなっている。

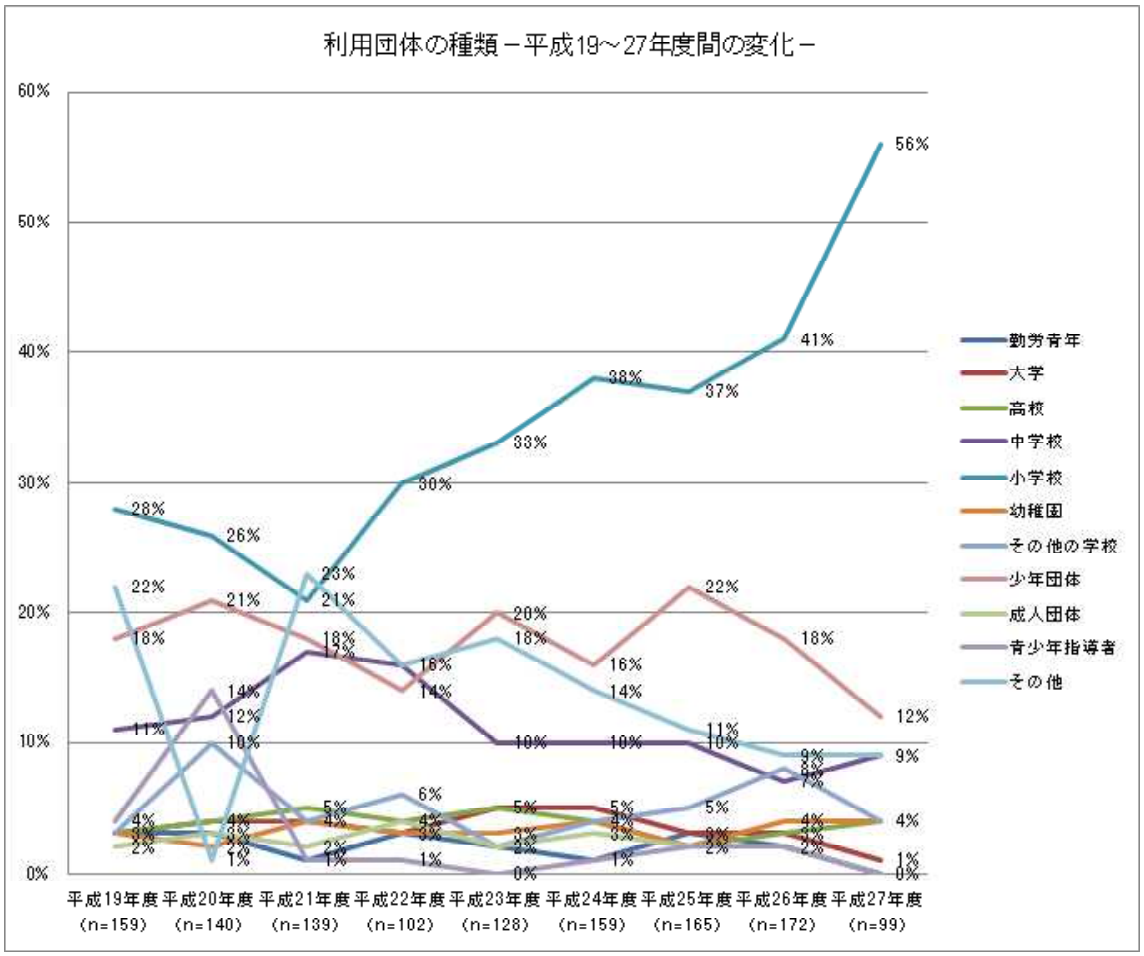


図2　利用団体の種類－平成19～27年度間の変化－

次に、利用団体の主たる年齢層については（図3)、「7～12歳」が74％で最も高く全体の3/4近くである。次いで高いのは「13～18歳」の19％である。

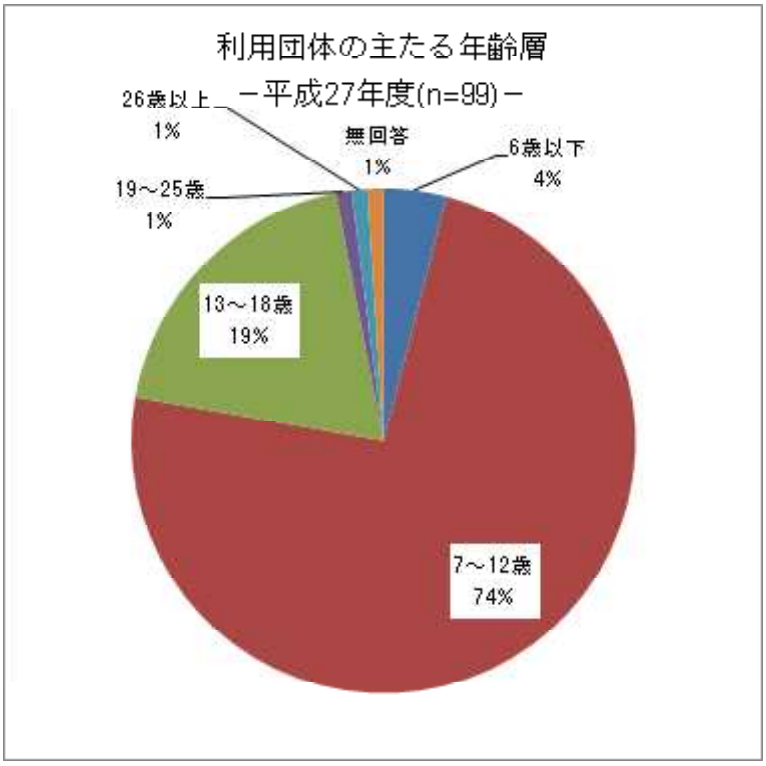


図3　利用団体の主たる年齢層

この利用団体の主たる年齢層を平成19～27年度の変化でみると（図4）、9ヶ年とも最も比率の高い「7～12歳」は平成21年度以降上昇傾向にあり、平成27年度までに23ポイント高くなっている。次いで高い「13～18歳」の比率は平成21年度以降は低下傾向にあり、平成27年度までに10ポイント低下している。なお、その他の年齢層はほぼ横ばいで、平成22年度を除けばいずれも1ケタ台の比率で推移している。

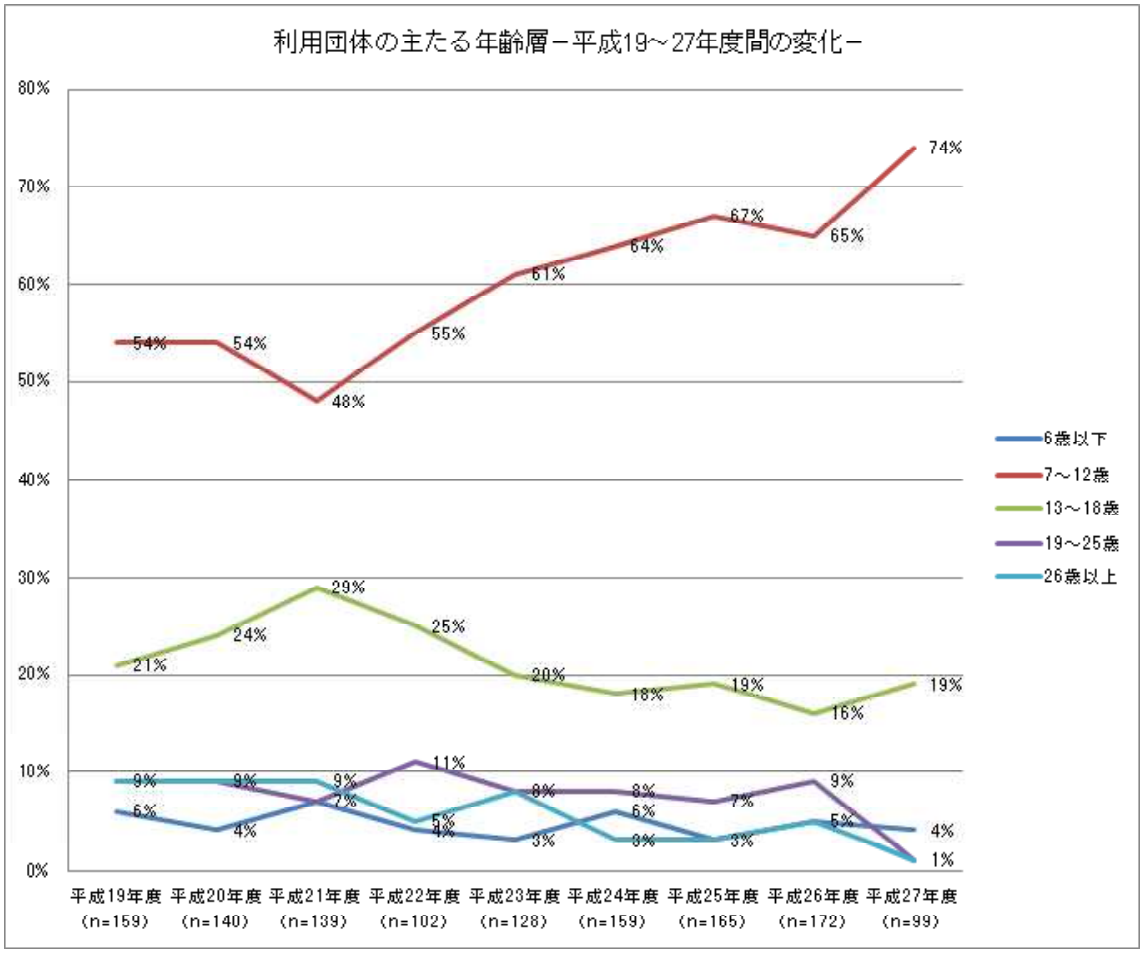


図4　利用団体の主たる年齢層－平成19～27年度間の変化－

さらに利用宿泊数については（図5)、「2泊」の比率が最も高く（55%)、全体の半数以上を占めている。次いで高い「1泊」(41%）も40%を越えており、両者で全体の9割以上を占めている。

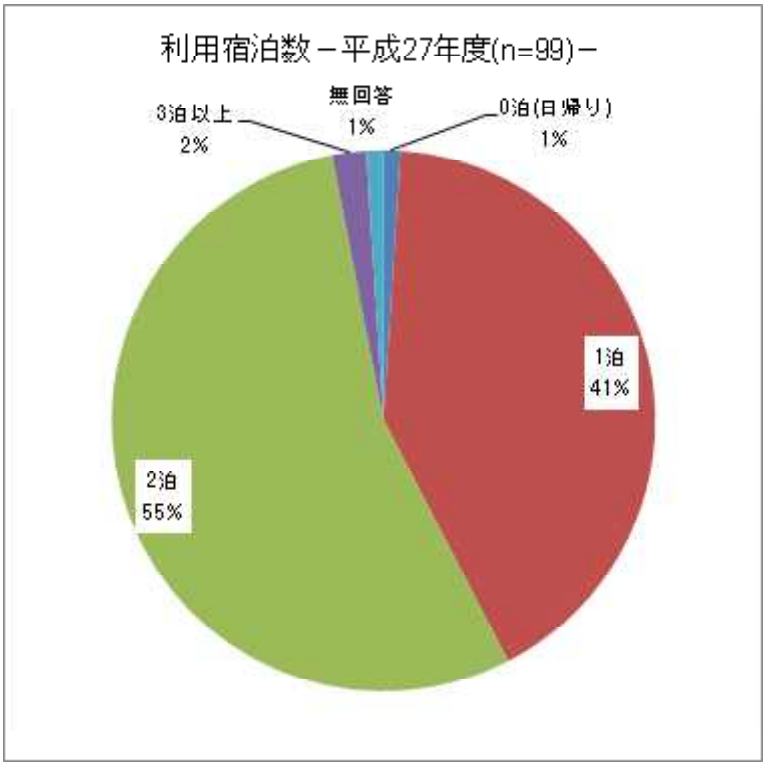


図5　利用宿泊数

この利用宿泊数を平成19～27年度間の変化でみると（図6)、平成26年度までは「1泊」が最も高い比率であったが、平成27年度にあっては「2泊」が最も高くなっている。また、「1泊」と「2泊」の全体における占有率は、平成21年度以降は8割を超え、平成25年度以降は9割台で推移している。一方、「0泊（日帰り)」と「3泊以上」の占有率については、平成20年度までは2割を超えていたが、平成25年度以降は1割以内で推移している。

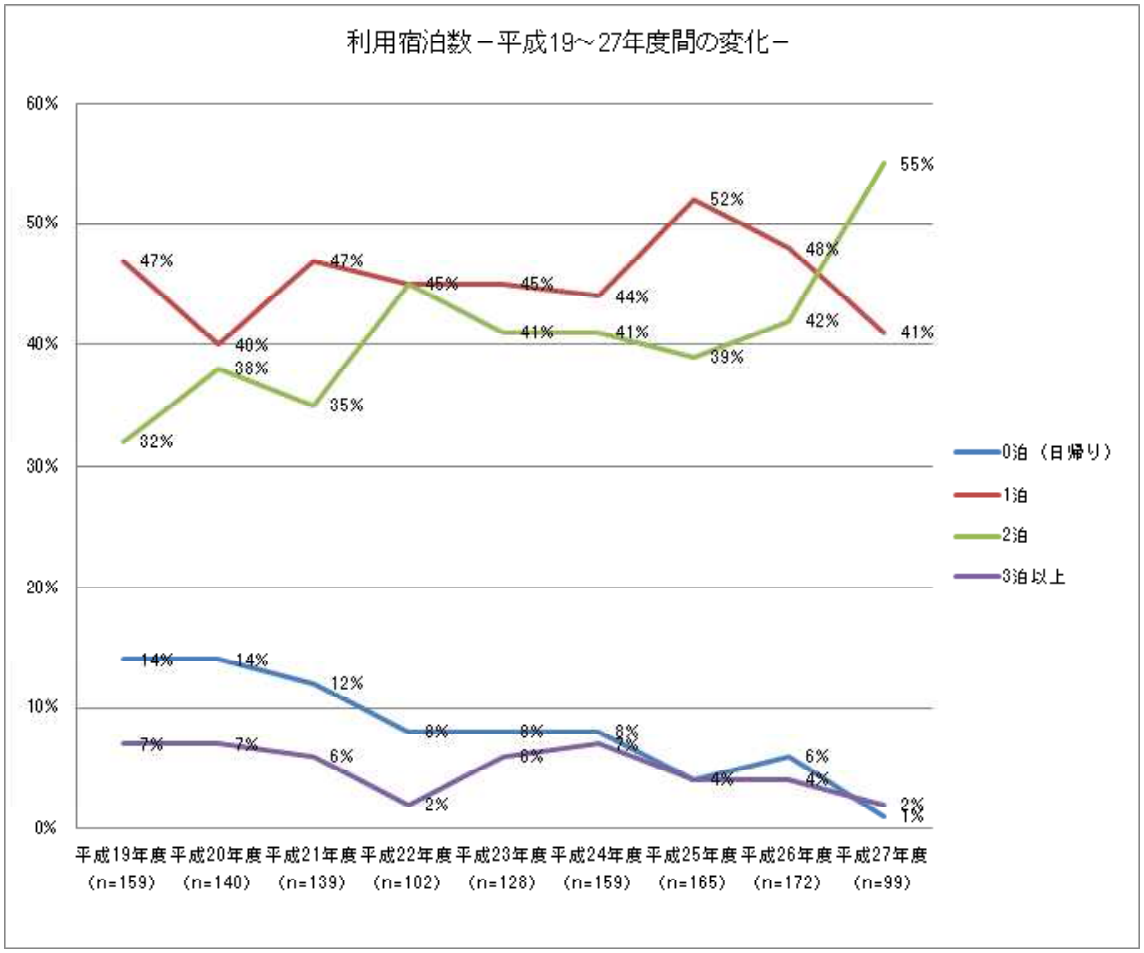


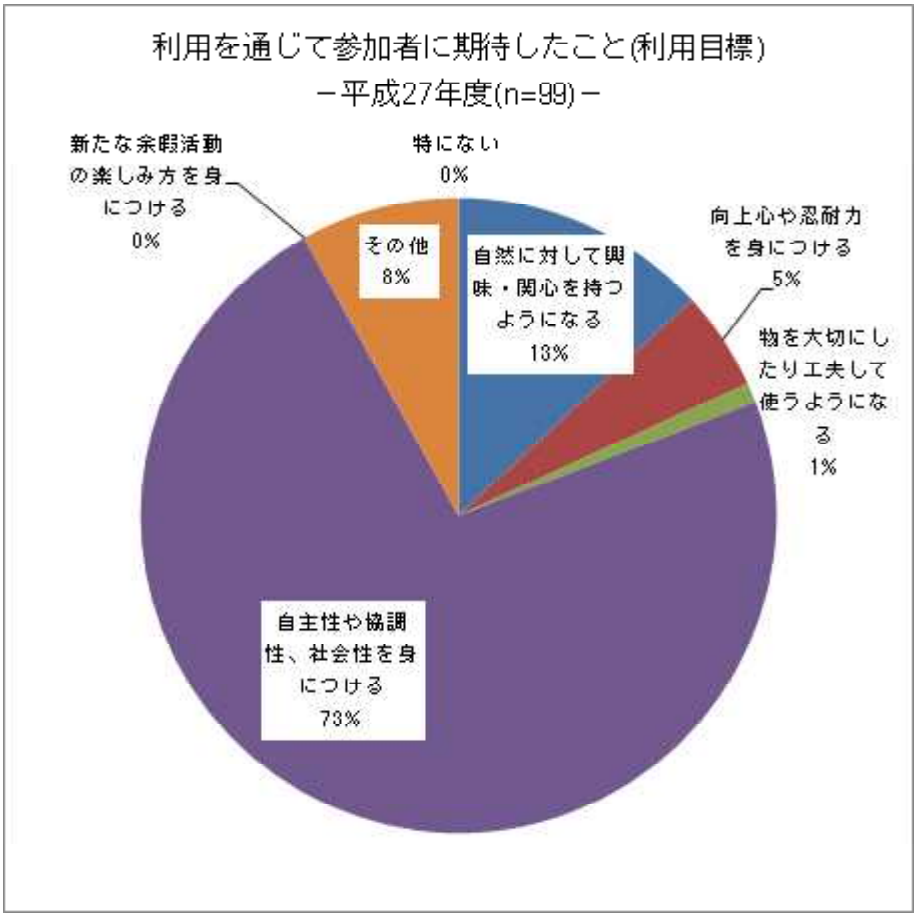
図6　利用宿泊数－平成19～27年度間の変化－

2.　利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）

ここでは、各団体が利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）（単数回答）を取り上げるが、ここでの項目は、青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議報告『青少年の野外教育の充実について』（平成8年7月24日）で挙げられている「野外教育の目標」および「野外教育に期待される成果」を参考にした。上記会議および報告については下記URLを参照（平成29年2月5日現在）。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/003/toushin/960701.htm

図7で示されるように、最も比率の高い利用目標は「自主性や協調性、社会性を身につける」の73%で、次いで「自然に対して興味・関心を持つようになる」（13%）、「その他」（8%）が続いている。



「その他」の内訳

環境について学び、興味をもつ，気づき、考え、やりぬく力を育てる，親睦を深める，体験をさせたい、プラネタリウム、スケート，他団体との交流，ひとり親家族どうしの交流を図る，富士宮市と近江八幡市の奨学生がお互いの親交を深める，普段見れない性質を見る事ができる

図7　利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）

この利用目標の平成19～27年度の変化については（図8)、「自主性や協調性、社会性を身につける」は9ヶ年を通じて最も比率の高い項目で、平成27年度で70%台に達し最も高い。次いで比率の高い項目は年々変化が見られるが、平成24年度以降は「自然に対して興味・関心を持つようになる」が10%台で推移している。

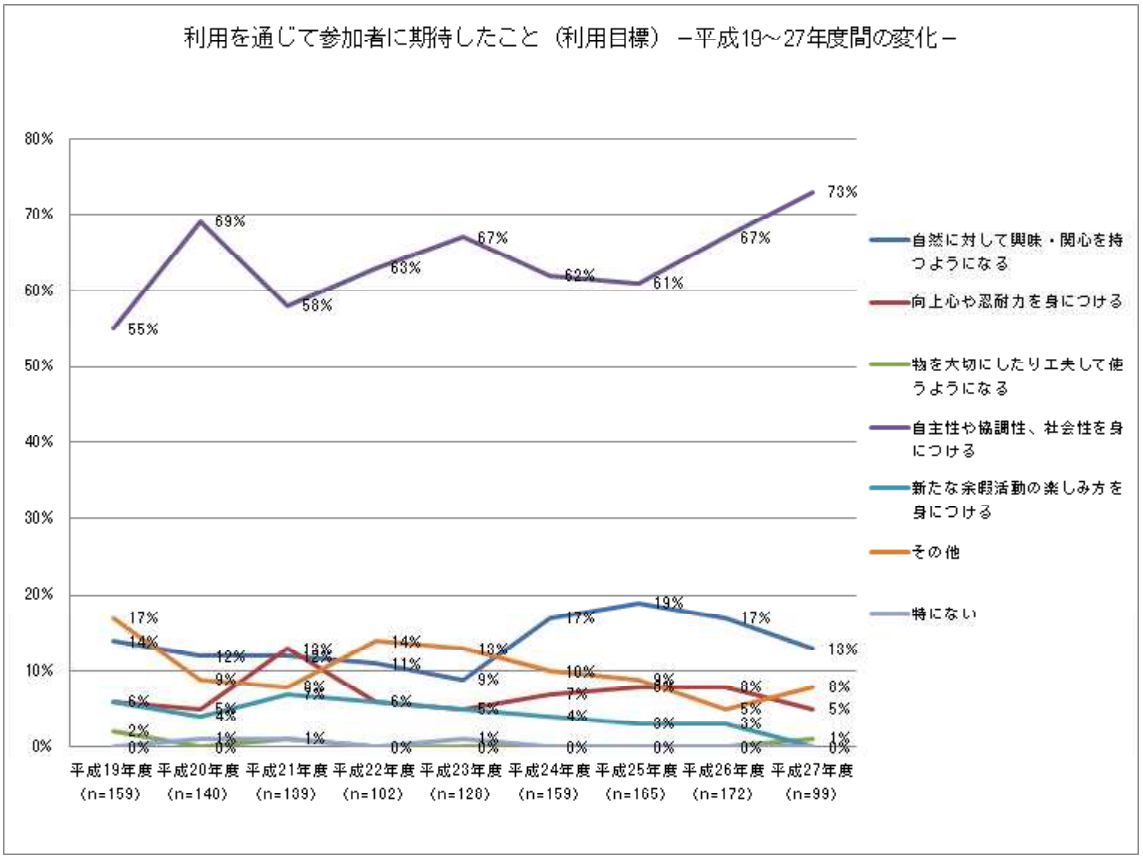


図8　利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）－平成19～27年度間の変化－

3.　利用目標の達成度

利用目標の達成度については、各利用団体が挙げた「利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）」について、今回の利用を通じて期待通り達成できたかどうかを、「期待以上にできるようになった」「だいたい期待通りできるようになった」「ほとんど期待通りできなかった」「まったく期待通りできなかった」の4段階のいずれかで各団体自身が判断している（回答者は利用団体担当者であるが、その選定は各団体の任意による）。

その結果、図9で示されるように、「だいたい期待通りできるようになった」の比率が最も高く（78%）、次いで高いのは「期待以上にできるようになった」の21%で、両者が全体の殆どを占めている。なお、「ほとんど期待通りできなかった」と「まったく期待通りできなかった」はどちらも0%である。

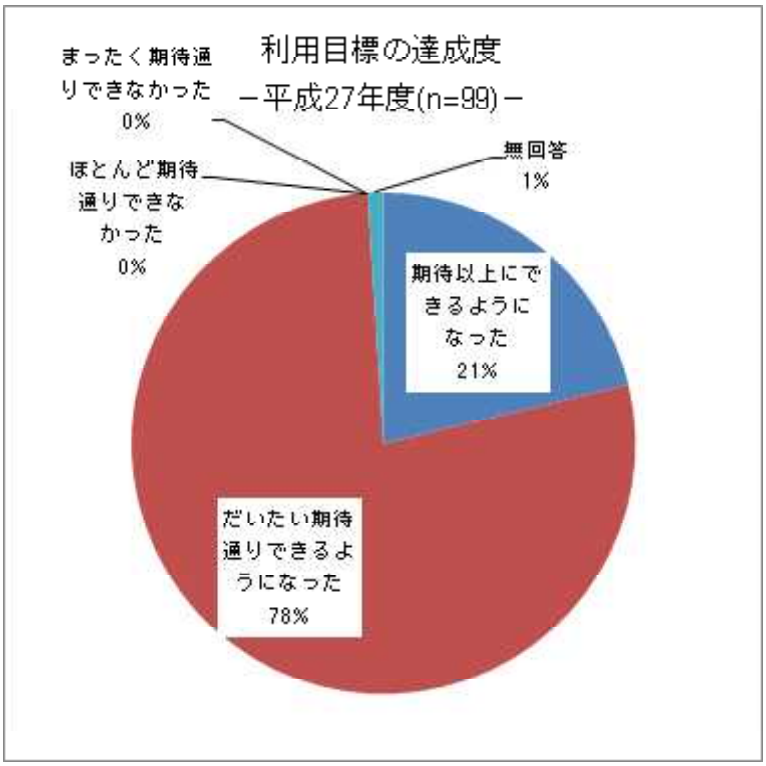


図9　利用目標の達成度

この達成度の平成19～27年度の変化については（図10)、「期待以上にできるようになった」と「だいたい期待通りできるようになった」を合わせた比率は9ヶ年を通じて90%を超えている。一方、「ほとんど期待できなかった」の比率については、毎年度5%未満で推移しており、「まったく期待通りできなかった」と合わせても5%未満である。

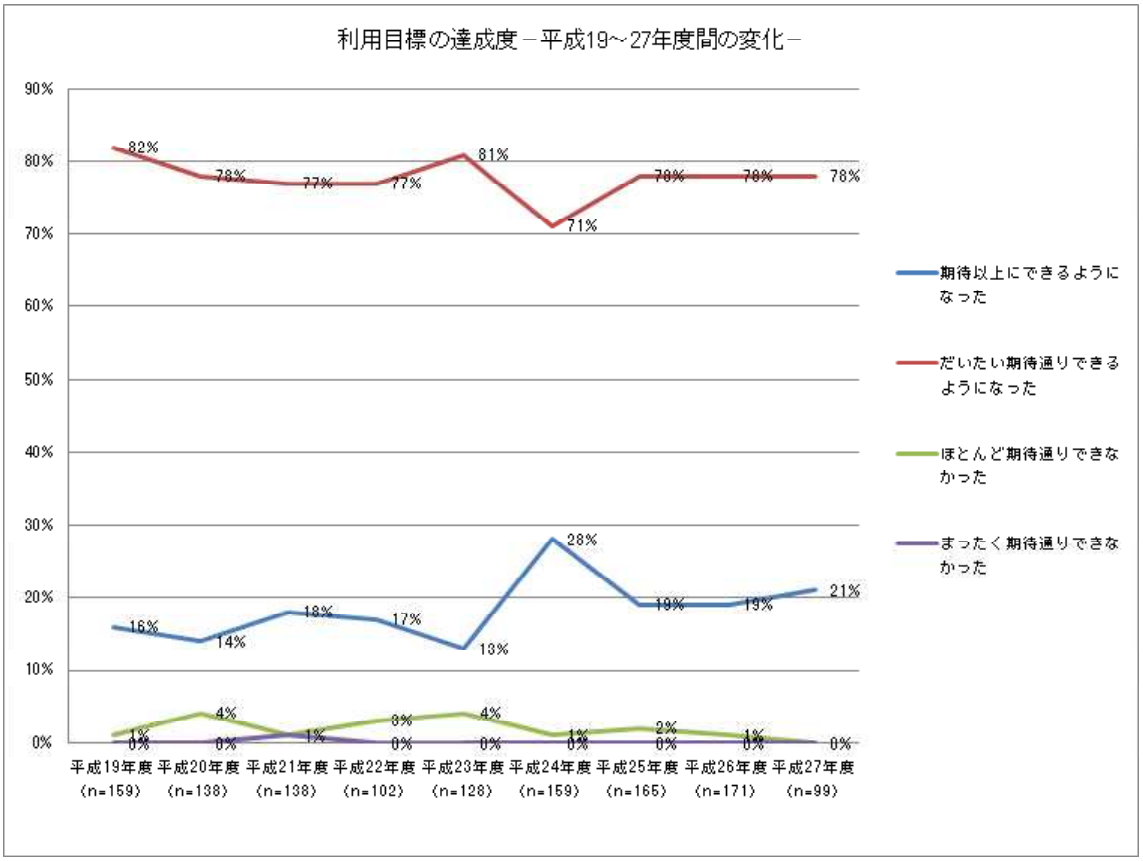
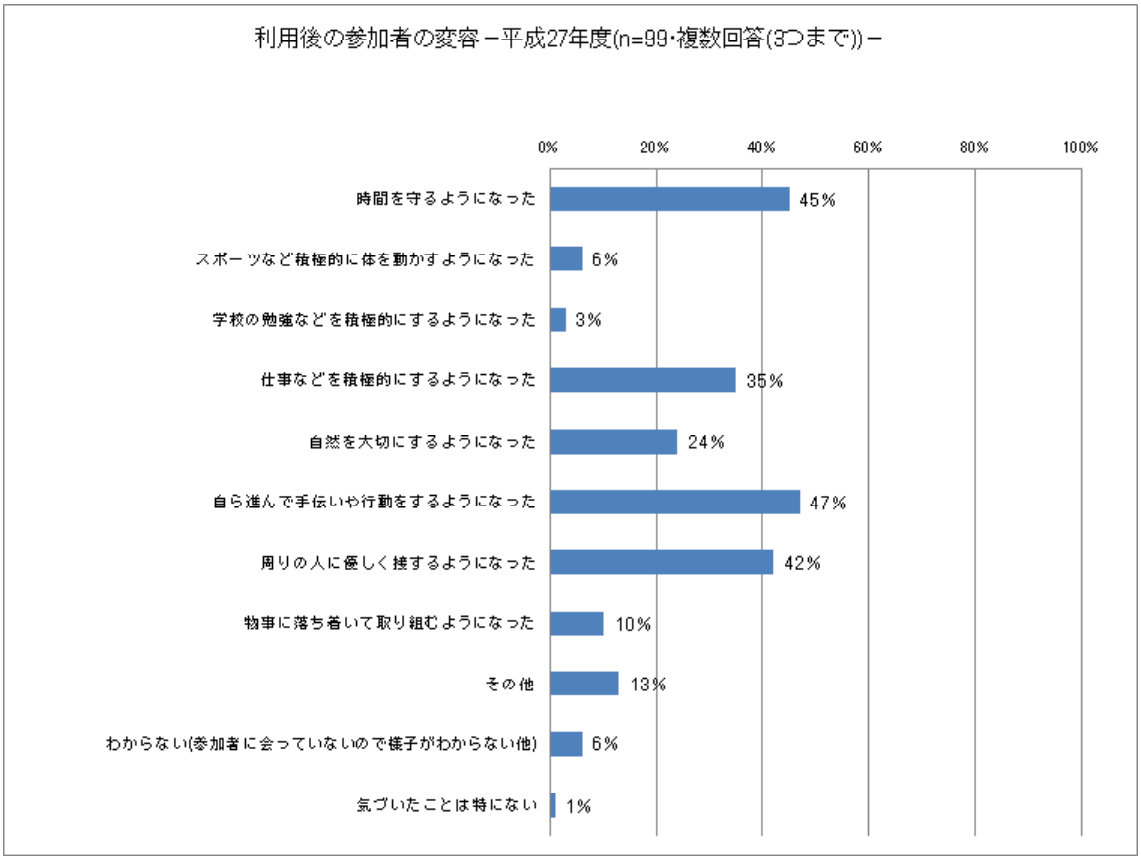


図10　利用目標の達成度－平成19～27年度間の変化－

4.　利用後の参加者の変容

利用後の参加者の変容については、利用後1ヶ月以内の変容について利用団体担当者が分かる範囲で捉えているが（複数回答・3つまで）、その結果は、「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」（47%）が最も高く、次いで、「時間を守るようになった」（45%）、「周りの人に優しく接するようになった」（42%）の順に高くなっている（図11参照）。



「その他」の内訳

一泊二日の活動で急に変わるのは難しい、継続的に活動してこそ変化があると思う，交流を積極的に行うようになった，参加した人達と友達になった、母親はリフレッシュできた，時間を意識するようになった、お互いに声をかけ合うようになった，自信がついた，特に変わった所はないですが、1泊2泊の合宿でチームワークもよくなり、入団したばかりの子どもも、チームにとけこむことができました，友だちと協力することの大切さに気づいた，友達と協力することの大切さを理解した，友だちとの親密度がました，友達を協力するようになった，仲間の大切さがわかった，班で協力して活動することを意識するようになった，富士山に関心をもつようになった

図11　利用後の参加者の変容

この平成19～27年度間の変化について（図12)、「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」が平成24年度以降最も比率の高い項目である。次いで順に高い「時間を守るようになった」と「周りの人に優しく接するようになった」は、平成27年度の比率（45%・42%）それぞれ9ヶ年で最も高い。「仕事などを積極的にするようになった」は、平成25年度までは20%台、平成26年度以降は30%台で推移している。一方、「スポーツなど積極的に体を動かすようになった」は平成21年度以降下降傾向にあり、平成27年度までに14ポイント低くなっている。

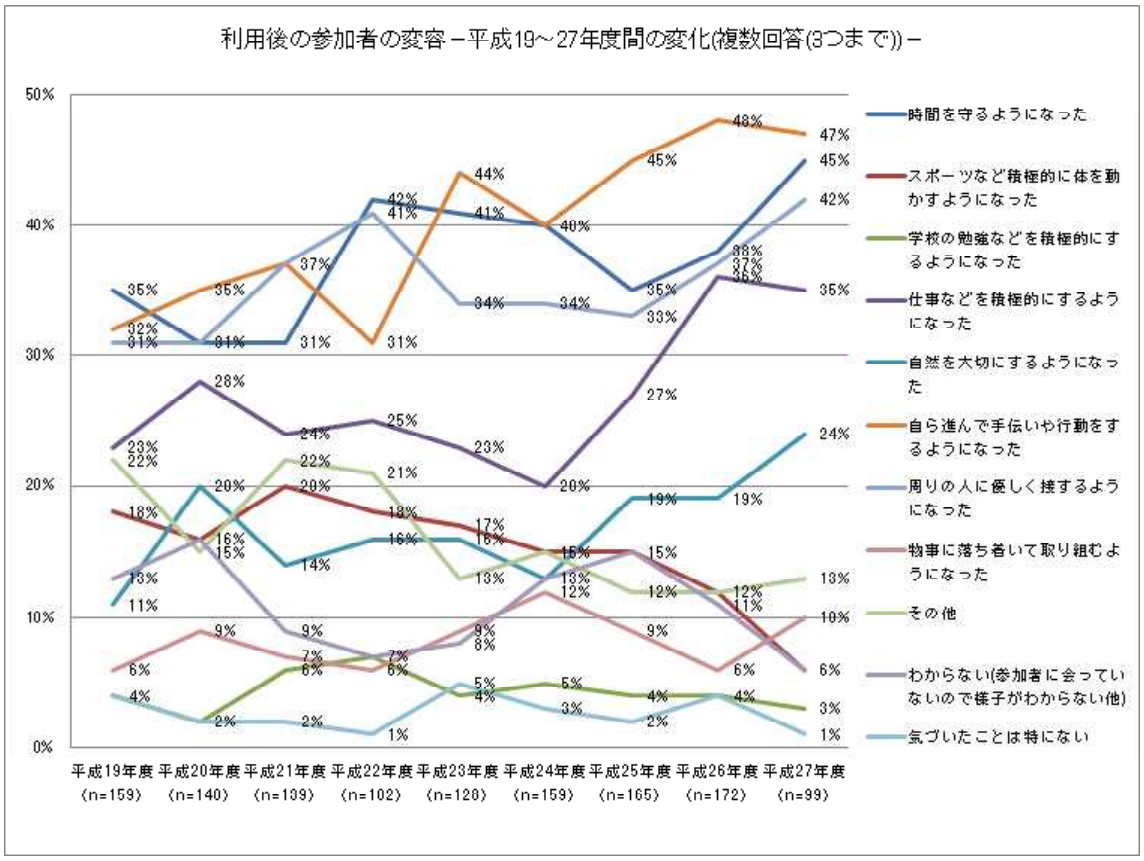
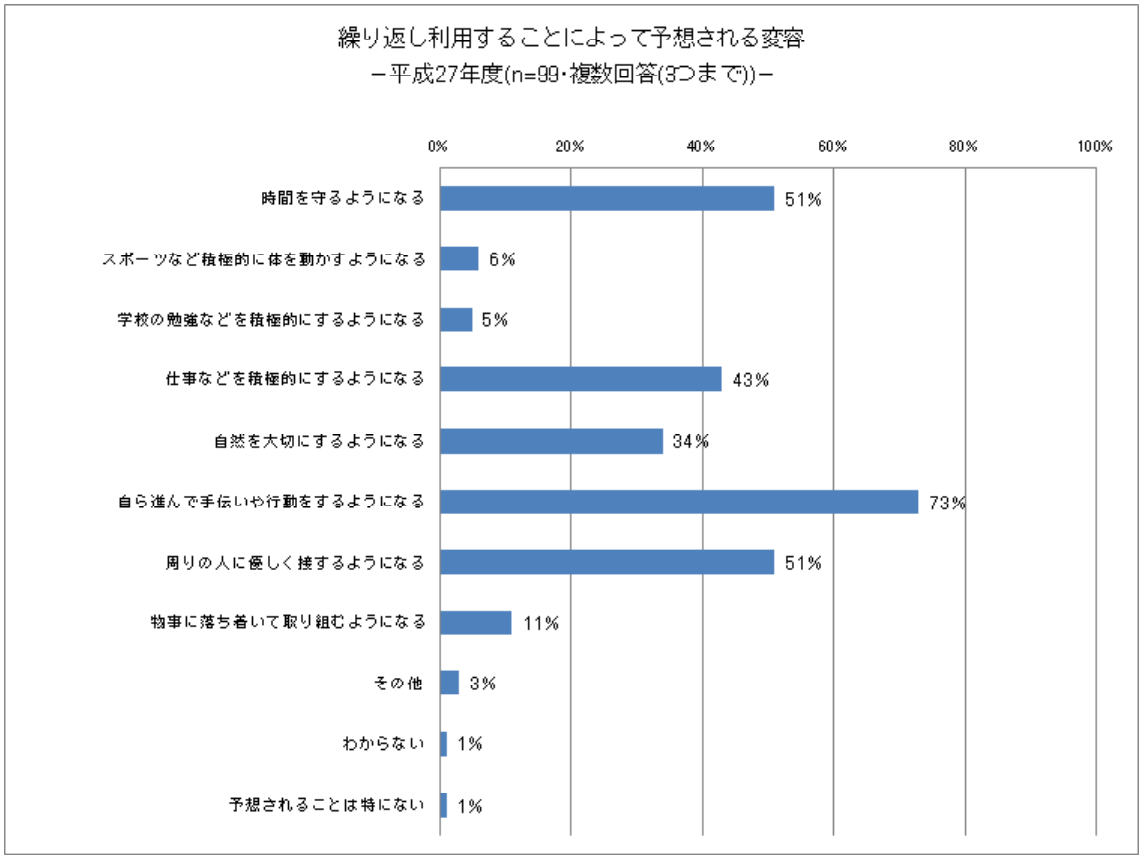


図12　利用後の参加者の変容－平成19～27年度間の変化－

5.　繰り返し利用することによって予想される変容

繰り返し利用することによって予想される変容は、利用後の参加者の変容と同じ項目について、今回各団体がそれぞれ計画した活動を繰り返し実施することによって日常の参加者に現れると予想されるもので捉えている（複数回答・3つまで）。その結果（図13）、「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」が最も高い比率で73%、次いで「時間を守るようになる」と「周りの人に優しく接するようになる」がともに51%で続いている。



「その他」の内訳

活動中できた友達と家族ぐるみでつき合うようになる，自己肯定感が高まる，他人と協力して物事を解決していく

図13　繰り返し利用することによって予想される変容

繰り返し利用することによって予想される変容は平成20年度から加わった項目であるため、図14の通り8ヶ年の変化を示すことになるが、それによると8ヶ年とも「時間を守るようになる」「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「周りの人に優しく接するようになる」の上位3項目は変わりない。特に、「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」は平成27年度（73%）にあって8ヶ年で最も比率に達し、次いで比率の高い「時間を守るようになる」「周りの人に優しく接するようになる」との差が22ポイントまで開いている。また、「仕事などを積極的にするようになる」の比率は平成24年度以降上昇傾向にあり、平成27年度で40%台に達している。一方、「スポーツなど積極的に体を動かすようになる」は平成21年度以降低下傾向にあり、平成27年度までに16ポイント低くなっている。

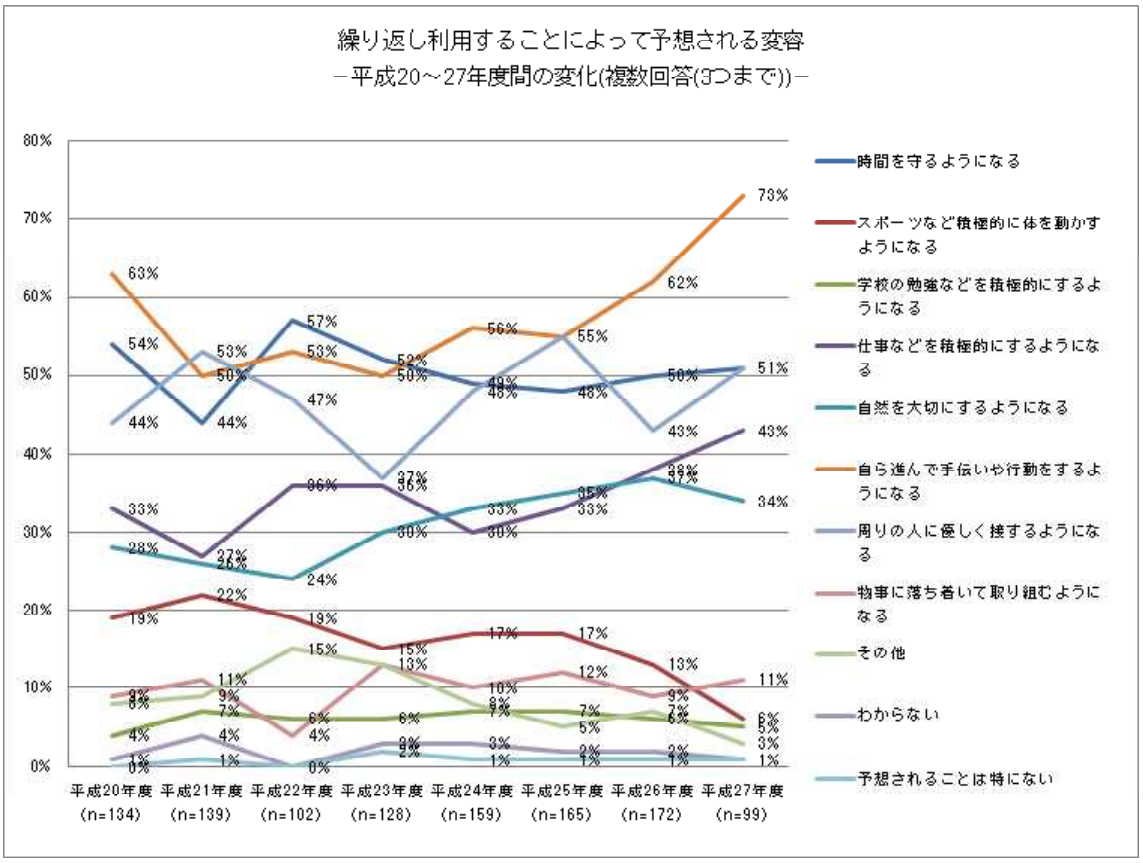


図14　繰り返し利用することによって予想される変容－平成20～27年度間の変化－

Ⅳ　調査結果のまとめと今後の課題

今回の調査結果は、次の4点にまとめることができる。

第1に、利用団体のプロフィール（利用団体の種類・利用団体の主たる年齢層）については、「小学校」と「7～12歳」がそれぞれ最も比率の高いカテゴリである。経年変化で見ると、「小学校」は、30％台後半で推移していたところ、平成26年度で40％を越え、平成27年度で50％を越えている。「7～12歳」は、平成23～26年度は60％台で推移し、平成27年度は70％に達している。利用宿泊数は、「1泊」と「2泊」が全体の殆どを占めながらも、平成26年度までは「1泊」が最も高い比率であったところ、平成27年度では「2泊」最も高くなっている。

第2に、利用目標の種類について、「自主性や協調性、社会性を身につける」は9ヶ年を通じて最も比率の高い項目で、平成27年度で70％台に達している。次いで比率の高い項目は年々変化が見られるが、平成24年度以降は「自然に対して興味・関心を持つようになる」が10％台で推移している。利用目標の達成度は、「期待以上にできるようになった」と「だいたい期待通りできるようになった」を合わせた比率が9ヶ年を通じて90％を超えている。

第3に、利用後の参加者の変容について、「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」が平成24年度以降最も比率の高い項目である。次いで順に高い「時間を守るようになった」と「周りの人に優しく接するようになった」は、平成27年度の比率がそれぞれ9ヶ年で最も高い。「仕事などを積極的にするようになった」は、平成25年度までは20％台、平成26年度以降は30％台で推移している。一方、「スポーツなど積極的に体を動かすようになった」は平成21年度以降下降傾向にある。

第4は、繰り返し利用することによって予想される変容についてで、平成20年度からの8ヶ年通じて「時間を守るようになる」「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「周りの人に優しく接するようになる」が上位3項目で変わりない。特に、「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」は平成27年度にあって最も高い比率に達している。また、「仕事などを積極的にするようになる」の比率は平成24年度以降上昇傾向にある。一方、「スポーツなど積極的に体を動かすようになる」は平成21年度以降低下傾向にある。

最後に今後の課題について、今年度新たに見られた傾向の検証の観点から述べておくと、次の2点が挙げられる。

その第1は、平成27年度にあって、利用団体のプロフィールも含め、過年度の傾向からの変化が見られた。しかし、平成27年度の回収率が10％台に落ち込んだことを考慮すれば、上述の変化は単なる回収サンプルの偏りによることも予想されるため、回収率を上げつつその傾向のさらなる検証が期待される。

第2は、平成26年度の報告でも指摘したが、利用目標の達成度が期待より低い場合の利用後の参加者の変容の特徴分析である。期待通り目的達成できなかった場合にもかかわらず、利用後の参加者の変容（あるいは繰り返し利用することによって予想される変容）が現れるとすれば、それはどのような特徴を持っているのかは今後解明すべき課題であろうから、今後サンプルの蓄積を待って追分析を行わなければならないと思われる。